

熊野筆の品質向上

熊野筆の品質向上

「古来書道に関する著書其の数少からずと雖も毛筆に関する詳細な著述は未だ曾て世に現はれたるを聞かぬも当然たりとす。余は毛筆製作に従事すること多年その間故日下部鳴鶴先生、小野鷲堂先生を殆とし新故書畫の大家諸先生の士並に諸官各学校等の用筆を製作し親しく諸先生の実験を聞き之を参考として製法を研究し良毛筆の製作に腐心し利益問題を離れて毛筆製作の技術をして向上せしめむことに努めたり其結果毛筆の良否は書畫道にとつては大なる関

係のあることを痛切に感ずるに至り聊が斯道のために研究を重ねたるものなり」(毫筆大鑑序文) 明治時代の中ごろから熊野町の筆産業は急速な成長を遂げ、そのため筆結(筆職人)の技術習得が間に合わず「熊野筆は安からう、然し悪からう」との汚名も全国に拡めたのです。 本町呉地区にある片川仁一郎記念碑にこの時の模様を次のように刻しています。 熊野村、製筆に於ケルハ只數の大ナルヲ以テ世ニ知ラレ其優等品ニ至リテハ素ヨリ得意

トスル所ニアラス特ニ優等品ヲ製出スルコトアルモ熊野ノ名ニ因リテ輕視セラル憾ナキ能ハス(以下略す)

明治期の熊野製筆業界に於て毛筆の品質向上に尽力した浅沼勘次郎氏の果たした役割は大きいものがあります。

浅沼勘次郎師碑

師性恬淡寡欲ノ士特ニ毛筆製作ノ技ニ長ズ明治二十八年居ヲ熊野ニ移サルヤ地人其ノ技能ヲ慕ヒ不肖ヲ始メ師、訓徳ニ浴シタル輩拳テ計フ可カラス 回顧ス本町今日ノ伸展ヲ来シタルノ因多々アリト雖モ師ノ如キ技巧卓絶ノ来熊ニ因スルヤ与テカアリト言フ可シ不肖其ノ門下ニ列スル旧縁茲ニ小碑ヲ建設シ万分ノ恩澤ニ奉シ聊カ黄泉ノ師ニ酬ス 昭和三年六月

門人 木戸壽七建之 浅沼勘次郎についてはその詳細は明らかではありませんが、石碑建立の前年死没した由です。

同人の門人とされる人々は木戸壽七のほか現在のところ城本穰一、佐々木忠葵、中村次良一今城奎一らの中が挙げられています。

熊野町史資料編



通知状
一毛筆製造作業
若大正十五年五月
皇太子殿下 本縣ニ行啓
被為在候際御前作業ニ供シ
候條此状及通知候也
大正十五年五月一日
廣島縣
佐々木忠葵殿